

談話資料からみた福岡方言アスペクトの実態

二階堂, 整
福岡女学院大学教授

<https://doi.org/10.15017/8914>

出版情報 : 語文研究. 100/101, pp.56-67, 2006-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

談話資料からみた福岡方言のアスペクトの実態

二階堂 整

1 はじめに

西日本方言では、「飲んでいる」の表現に、進行相を示すヨル形（ノミヨル）と結果相を示すトル形（ノンドル）の2つのアスペクト表現を有す。工藤2001などの科学研究では、全国のアスペクトの状況を明らかにしてきた。この科研は全国統一調査票によるアンケート回答方式（以下、「回答式」とする）をとった。この研究を踏まえ、本稿は、福岡を調査地とし、談話によるアスペクト研究を試みたものである（以下、「談話式」とする）。今回のねらいは2つ。調査法の問題と先行研究の結果の検証である。

なお問題の焦点を絞るため、ここでは、福岡方言の、文法項目はアスペクトのみ、具体的には、トル形とヨル形の使い分けに関わる事柄に限定する。

2 回答式研究（工藤2000、2001の科学研究）

これらの科学研究は、全国統一調査票により、実施された。併用も積極的に記入するものであった。アスペクトの理論的枠組みは工藤1995による以下のものである。

アスペクトの種類

動作開始直前・開始後動作継続・完了後の変化を見て・完了後の痕跡を見て・
反復習慣・経験記録

動詞の種類

主体動作動詞（非内的限界動詞）・主体動作客体変化動詞・主体変化動詞
（内的限界動詞）・心理動詞

次に実際の調査資料の一部を示す。地点名の後に話者の年齢を二階堂が加えた。

主体動作動詞（非内的限界動詞・他動詞） テンス現在 動作過程継続

お父さんがビールを飲んでいる最中（九州のみ抜粋）

福岡県小郡市	25歳	オトーサンガ	ビールバ	ノミヨルノ？ノンドル
福岡県北九州市	45歳	オトーサンガ	ビールオ	ノミヨルノノンドル
福岡県宮田町	45歳	オトーサンガ	ビール	ノミヨーノノミヨル
福岡県久留米市	47歳	トーチャンノ	ビールバ	ノミヨル
福岡県福岡市	35歳	オトーサンガ	ビールオ	ノミヨーノノミヨル ノノンドーノノンドル
福岡県前原市	46歳	オトーサンガ	ビールバ	ノミヨーノノンドー
佐賀県佐賀市	42歳	オトーサンノ	ビールバ	ノミヨッノノンドッ
熊本県天草郡	44歳	トーチャンノ	ビールバ	ノミヨルノノンドル
熊本県松橋町	32歳	オトーサンガ	ビールオ	ノミヨル
大分県大分市	41歳	オトーサンガ	ビール	ノミヨル
大分県竹田市	26歳	オトーサンガ	ビールオ	ノミヨル
宮崎県清武町	52歳	トーチャンガ	ビール	ノミヨル

回答した話者は、その地出身の方言研究者などであり、筆者も話者（大分市）として、調査に参加した。よって、上記にみられる併用は、意味のある併用を示していると考えられる。すなわち、進行相を「ヨル」でなく「トル」でも表現できるということである。

工藤2001では、九州・中国・四国のアスペクトにつき関連する箇所を、以下のまとめをしている。

調査研究の結果の概要（該当部分を抜粋。以下、「概要」と称す）

「シヨル」と「シトル」のアスペクト対立がうしなわれつつある。「シヨル」形式の意味の方が「シトル」形式で表現されるようになっていき、逆の傾向はない。

これは<動詞のタイプ>からいうと、主体動作動詞（非限界動詞）からはじまる。なお、すべての方言において、「思う」のような状態的な動詞では、基本的にシヨルとシトルのアスペクト対立はない。

ただし、シヨル形式が存在するにもかかわらず、主体変化動詞の<変化過程>までもシトル形式ではっきり表現する方言は見られない。

文法的意味観点からいうと、非限界動詞の〈動作進行〉をシトル形式で表現できるようになると、動詞のタイプを問わず〈反復習慣〉がシトル形式で表現できるようになる。具体的1回の変化では「金魚が死による」のかわりに「金魚が死んどる」と言える方言はないが、「毎日人が死による / 死んどる」の両方を使用する方言は複数ある。

シヨルがあらわす〈直前〉のアスペクト的意味は、すべての方言ですべての動詞に見られるわけではない。

コンテクストの観点からいうと、直接目撃しているような場面の支えがある場合に（シヨル形式ではなく）シトル形式が使用されやすい。コンテクストの支えがない場合には主体動作動詞（非限界動詞）であっても、〈動作進行〉はシヨル形式が使用される傾向が強い（シトル形式を使うと〈進行=限界達成前〉なのか、〈痕跡=限界達成後〉なのかが区別できないからである）。

これら科学研究以外でも、上記と同様の結果を示すものがある。

国立国語研究所1999『方言文法全国地図』4巻 198図「散っている（進行形）」

九州、中・四国ともそのほとんどがヨル形であるが、福岡は11地点中、2地点にトル形（含チヨル）との併用が見られる。

九州方言学会1969『九州方言の基礎的研究』風間書房
広域調査項目「雨が降っている（進行態）」

九州のほとんどは、ヨル形。ただし、福岡24地点中、老年・中学生ともに5地点はトル形併用（含チヨル）。

以上から、福岡では、すでに進行相を「ヨル」でなく「トル」でも表現することが広がりつつあるように受け取れる。しかし、これらはいずれも、回答式調査であった。実際の生活の中では、どう使用されているのか、観察・検証する必要があると思われる。よって、次章で、同じ理論的枠組みをかり、福岡の談話資料をもとに上記概要の結果を検証する。

3 談話式研究（福岡談話資料による調査）

工藤2001, 2002の結果から、大分などは進行相でヨル使用を保つ古いタイプであるのに対し、福岡ではそれがくずれ、進行相でヨル・トルの併用が見られることがわかってきた。さらに福岡は九州の大都市であり、言語の動きも大き

いと予想される。談話資料での観察・検証に福岡を取り上げた理由はこれらによる。

以下、A B C D E 5つの談話資料を利用する。A B C Dはすべて、福岡及び近郊出身者（筑前方言話者）で、かつ女性2名の約1時間の対話形式。2003年7月から2004年3月に、研究室で録音。A B Cは各20、21歳の女子大学生、Dは49歳と51歳の女性の談話。Eは福岡市の生え抜きのご夫婦（男性80歳 女性77歳）の約1時間の談話（2005年9月、ご自宅で録音）である。うちAを中心として論ず。なお、A談話は二階堂2004にすべて文字化して記載している。

3 - 1 A談話（20、21歳の女子大学生の談話）

福岡市東区の生まれ・育ちの女子大学生2名（T21歳、A20歳）の談話。

なお、ヨル・トルと類似したものに、ヨク・トクがある。今回の対象から除外したが、区別困難で、微少なからそれらも含む可能性がある。ただ広い意味では同じアスペクト表現である。

談話中のアスペクト形式

ヨル形75

主体動作動詞61 遊ぶ 言う30 話す しゃべる 笑う2 飲む 吐く5
動かす 書く 読む 量る 見る 着ていく する8 チャットする2
研究する 話する やる おさまる
主体変化動詞5 行く 来る（戸惑った）顔する 向く 引っかかる
主体動作客体変化動詞2 入れる 使う
心理動詞6 考える 喜ぶ 思う4
存在動詞1 ある

トル形87

主体動作動詞15 待つ 聞く しゃべる 動く する2 書かれる2 やる
3 言われる 似る3 録音される
主体変化動詞37 行く 落ちる 着る2 産まれる3 並ぶ 乗る2 焼ける2 出る2 座る 太る 痩せる 付く2 離婚する 入る3 目指す
2 話尽くす 宣言する 浮く 住む 細くなる 壊れる2 なる2 する ばれる 過ぎる

主体動作客体変化動詞6 置く 出す つなぐ 動けなくする 固定する2
心理動詞29 思う3 あせる わかる はらはらする 照れる 知る8 元
気(に)する 思われる 覚える2 (好きに)なる2 しっかりする
あたふたする 楽しみにする どーどーとする 忘れる2 ぴんぴんする
(している) 慣れる

テイル形(含テル) 18

否定14 持っていない3 覚えてない2 吐いてない 付いてない 焼けてな
い3 壊れてない 着てない 載っていない シャベっていない
否定以外4 思っていました 切れてるんです きれって もりあげてて

3 - 2 D談話(49歳と51歳の女性の談話)

ヨル形44

主体動作動詞18 する11 言う5 打つ 仕事する
主体変化動詞21 休む4 拒否する2 (電話を)かける 持っていく2
買う 来る4 着く 行く かたまる 抜いていく 見る 帰る なって
いく
主体動作・客体変化動詞3 (モップを)かける 切る 出す
心理動詞2 考える 思う

トル形43

主体動作動詞7 書く3 通る する2 待つ
主体変化動詞28 入る6 座る 頼む 空く なる3 出張する もてる
(もてもての意) 飼う 出る 終わる2 買う 付く 持ってくる 決ま
る 退職する 延びる 茶色くなる しびれる もらってくる 残る
主体動作・客体変化動詞6 載せる 散らかる 作る3 書き出す
心理動詞2 安心する 考える

テイル形(含テル) 10

否定5 通してない 来てない してない 書いてない 入っていない
否定以外5 売ってる 変わってる 押さえてる もててる(もてもての意)
出してる

3 - 3 B・Cの談話 (いずれも20、21歳の女子大学生談話) (主体動作動詞
に下線)

< B ヨル19 (うち主体動作動詞15) トル20 (うち主体動作動詞4) >

ヨル形19 話す 言う5 探す2 打つ2 する2 しゃべる 遊ぶ 聞く
かける 思う やる 来る

トル形20 待つ 働く2 つきあう 思う3 知る 黙りこくる4 孤立す
る 置く 絞める 重ねる なる 覚える3

テイル形10/否定4 聞いてない2 うまくいってない2 /否定以外6 知っ
てる 取ってる 信頼してた 言ってた (犯罪を) 犯してる 不安がっ
てる

< C ヨル88 (うち主体動作動詞56) トル67 (うち主体動作動詞17) >

ヨル形 する15 話す2 言う28 言い合う 語る 続く2 言われる か
んばる 笑う 聞く 見る 話する 泣く 思う11 来る5 会う 行く
9 払う 考える やる 休む 来てくれる 教えてもらう

トル形 見る 言う7 似る する4 聞く 言われる2 泣く 出る3
寝る 間違う3 思う2 来る3 離れる 盛り上がる していい 入る
3 忘れる プツンくる だまされる 覚える 入れてくる なる7
帰る 断る 別れる 取る3 行く 変わる めぐまれる 入れる 許し
てくれる かわいがられる される 考える 耐えてくる 座る2 移る
気に入られる 取る

テイル形10/否定5 なってない 入ってない 言っていない 誘ってない 思っ
てない /否定形以外5 思ってた 思ってる 思ってた 取ってない
行ってる

3 - 4 E談話 (男性80歳 女性77歳の談話)

E談話は、調査者が同席する形で収録を行った。よって純粋な二人の対話では
なく、時々、話者が調査者に話しかける形で進行した。しかし、ヨル・トル
も以下のごとく頻出し、「昔は軍艦をこうやって作りヨリマシタネ」などと調
査者に向かって話す場合も方言形ヨルが使用されていた。福岡の高年層ではよ
そゆきの場面でも、方言を使用するのが特徴であり (二階堂2005)、今回のヨ
ル・トル使用調査という目的においては、大きな問題はないと考えられる。

ヨル形86

主体動作動詞45 受ける 言う9 歌う 動く 踊る おこる 言い立てる
かかる2 かす 聞く2 する11 通る2 通ってくる 逃げて回る は
やる 話す2 見える 見る やる4 笑う
主体変化動詞30 行く16 来る5 こしかける 帰る 出る2 なる2 逃げ
ていく 乗っていく もっていく
主体動作・客体変化動詞8 作る5 使う2 運ぶ
心理動詞3 思う3

トル形53

主体動作動詞13 書く する7 そだつ2 死ぬ2 待つ
主体変化動詞30 行く5 来る 決まる 変わる2 くずれる 変化する
付く なる6 残る2 寝る 載る 持つ6 もって行く 休んでしまう
主体動作・客体変化動詞3 作る 出す 残す
心理動詞7 思う5 覚える 知る

テイル形 (含テル) 18

否定2 覚えてない させてない
否定以外16 行ってる 思ってる やってる2 わかっている そだってる
知ってる 入ってる やってる 動いている 無くなってる 使ってる なっ
てる 来てる そだってる つきあってる

3 - 5 数からみたヨル・トル

ヨル・トルの調査において、談話資料が有効な点は、出現数が多いということである。よって1時間程度の談話でも、十分な資料が得られ、検証資料として使用に耐えうると考えられる。ただし、質の問題が残る。今回は特に若年層において、いかに自然な談話を収録するかが重要な決め手となる。その点ではすべての談話がその条件を満たしたと考えている。例えば、A談話では、二人が幼稚園からの知り合いで幼馴染であること、談話の中に、福岡方言が他にも頻出すること(3 - 6参照)、プライベートな話題が多いこと(文字化の際、置き換えを施した部分や、省略せざるをえない部分があった)などからである。

さて、これらA B C D Eのどの談話も、ヨル・トルの使用数が半ばし、また、主体動作動詞においては明らかにヨル使用が多いことが見てとれる。どの

意味で使用しているか（進行相の意味か）が問題ではあるが、ヨル・トルがかなりの数、出現しており、5つの談話（うち3つは若年層の談話）で、同じ傾向であることは（数からだけではあるが）、どの談話も、ヨル・トル対立が安定しており、概要 にはあたらぬのではないかと考えられる。

3 - 6 主体動作動詞のトル・ヨル使用

ここでは、A談話を利用して、どういう状況・意味で使用されているのかを細かく見ていく。

概要 によれば、変化は主体変化動詞から起こるとされる。そこでA談話から、トル形になっている部分をみていく。

主体動作動詞15 待つ 聞く しゃべる 動く する2 書かれる2 やる
3 言われる 似る3 録音される

このうち、「待つ」「似る」の場合はヨルは使いにくいと思われる。また、「やる」の場合は、「北九州の子が高校時代によく「何やとーん」と書いて、福岡の「何やりよん」と違う」という話題をしている場面に出てくる「ヤットル」なので例外となる（これを受け、北九州の若年層の談話調査も実施した。20歳女子大学生2名の1時間程度の談話。その結果、3 - 5の福岡と同一傾向であった）。よって、15例中7例は除外できる。主体動作動詞でトルとなるもので問題となるものは、8例になってしまうのである。

次に主体動作動詞のヨルを以下の資料でみていく。A談話から該当の部分を抜粋する（括弧の表記については3 - 7で述べる）。11、45、49、51とよくヨルが使用されている姿がうかがえる。さらに概要 で反復習慣にトルが現われるとされる。しかし、188、190、191、192は反復習慣の場面でヨルが使用されていることがわかる。以上の点からも、談話において、ヨル・トルの対立はよく維持されているよううかがわれる。

- 11T (高校の友人が昔) ワカラン アソビヨッタ (T・A) トキ イーヨッタ
タモン ケンガイ イクーッテ ダイガク
12A ウソー イケタトカイナ ナンカサ レベルノタカイトコ メザシトッ
テ (0・2) イッカイ ローニンカナンカ

- 45T ウチ コンマエ オトーサント ゴハン タベイッタトキニネ サイショ
 ビールノミヨッタチャケド オトーサン トチューデ ショーチューニ
 カワルツタイ ショーチューノ ムギワリッテ イーヨツタンヨ イミ
 ワカランヤロオ
- 46A アハハハハハ
- 47T ウチガ パッテ コーミテ ムギワリッテ ナクナイッテ ムギノ ミズワリ
 カ ロックヤロー オユワリヤローッテ イッテ カンガエヨツタモン
 ズット エッテ
- 48A マジデ
- 49T イヤ ダケン ムギワリッテッイッタヤンテ イッタラ アーッテ イー
ヨツタ
- 50A ムギワリッテ イワレタラ コマルネ
- 51T コマルヤロー ダッテネ ダッテ ソノ テーインサンモ エッテユー
 カオシヨツタ (0・2) ムギデスカァー
- 188T ウチ ヨーチエンノトキサァー アノ 福岡北 スイミングスクール
 イキヨツタ (T・A) ヤン ミンナデ デモネ ナンカ シランケド
 ウチ チガウ ベツメニューツツカ ナンニンカ ベツメニューシヨ
ラン (T・A) カッタ グループガ アッテサァー コノヒトタチワ
 ナンカ バタアシ コノヒトタチワー ナンアレ ビートバン ツカッ
 テ イートカ
- 189A アー ビートバン ケッコヤツタ スベリダイモ シタヨーナ キガス
 ル
- 190T アー シヨツタ シヨツタ シヨツタ
- 191A ネー アレワ オボエテナイナ イエーイ バッチモラッターッテ ヨ
ロコビヨ (0・2) コトシカ オボエテナイ
- 192T サンキューニナッターッテ イーヨツタ ウチ オヨギ ウマカッタト
 ヨ

3 - 7 追調査

さらに、追調査も実施。文字起こしした会話のヨル・トルが出ている部分を (タバヨル・タベトル) のように併記し、時間をおいてから、当該の2人の学生にどちらを使用かの判断を求めるアンケート調査を実施した。ヨル・トルの

後ろに () で記入。(0・2) なら、もとの資料と逆を2人が選択。(T・A) はTがもとの資料の同じものを選択、Aが逆を選択したことになる(3-6の括弧参照)。つまり、左側が資料と同じ、右側が資料と異なる意味となる。その結果、A談話では162箇所中、もとのものと異なる選択が36あった。

先の3-6の資料では異なる選択のみ表記した。これらから、概要の問題を考えたい。実際の談話の場合と回答が異なるものについて、二人の話者に理由を尋ねる調査を行った。二人の話者によれば、11、51、188、191では、改めて読んで考えると過去の事だから、トルを選択した。しかし、話している最中は、今、話題が展開しているのでヨルを使用したとの判断。逆に12はその話題では進行している事態なのでヨルを選択とのこと。他の談話で、回答が談話とずれた箇所もほぼ同様の説明であった。つまり、話者の意識としては、会話中にその話題が展開している場合は進行ととらえ、ヨルを採用するのである。いわば、目の前性ともいうべき、いきいきと事態を思い浮かべている時は、たとえば、過去の出来事でも、ヨルを採りやすくなるのである。概要では、コンテキストの支えがあることで、トルの使用が起こるとされるが、この資料からは、逆にコンテキストの支えがあるからこそ、ヨルがとられることを積極的におしすすめると考えられるのである。だとすれば、福岡の談話においては、やはり進行相でヨルの使用はよく保たれると考えていいようである。

3-8 テイル形の問題

談話A~Eに、テイル形(含テル)が出る場合が、少数あり、その使用にある傾向がある(3-1から3-4参照)。E談話では、やや他の談話に比べ、使用数が多いが、これは、調査者が同席したため、調査者へ話しかける・聞かせる場面があり、その際に出てくることが多かったので、例外として扱う。

では残りのA~Dはどうであろうか。まず、目立つのは、否定形が多いことである。4つの談話ともに半数近くが否定形である。その一方で、ヨル・トルの否定形(ヨラン・トラン)は非常に少ない。B、Dは無し。Cは、「間違ったらん」「離れたらん」の2つのみ。Aは完全な否定ではないが、1つだけ、「別メニューしよらんかった」があるだけである。また、次のA談話の例にあるよう、トル形の後にテイルの否定がくるなど、偶然とは考えにくい点がある。

248 T (日焼けで) チョット テワ ヤケトーケド デモ カオワ ヤケテナ

イヨ

さらに、否定形以外でも、ある傾向がある。会話を挿入した場面（例 B 談話（先輩へ）ミンナ シンライシテタンデスヨー トカイッテタヨ）、よそゆき場面（例 A 談話（戻ってきた教員に対し彼氏のことで）834A ヒトゴミガ キライダカラ ヒトコトモ シャベラズ メッチャ キレテルンデスヨ 935T デ ソレニ 花子チャンモ キレテテ 936N アー ナンデ セッカク 937T フタリデ イッショークンメー モリアゲテテ）、方言使用がなじみにくい語句（例 B 談話 ソーユー ハンザイ（犯罪）オ オカシテルトワ オモワナイジャナイ ッテカ）でテイル形が使用されている。これらは、テイルでなければ致し方ない場面である。そういう場面では、方言形ヨル・トルの使用をさけているのである。

こうしてみると、若年層を中心に、アスペクトの否定形では、「ヨラン・トラン」を使用せずに、「テナイ」を使用する実態が浮かび上がってくる。こうした現象の原因として、予想されることとしては、否定の場面においては、ヨル・トルの区別が重要でなくなる（否定であるから）ということ、否定のもつ役割が関係していると思われるが、この点は今後の課題としたい。

また、（自戒をこめてのことであるが）回答式の際にはヨル・トルの否定の場合はどうかとを考えてしまい、「テナイ」の可能性を思い浮かべることが十分であったかは気がかりな点である。回答式の結果（「飲んでる最中ではない」の表現の回答）では、九州において、ノミヨラン・ノンドランのゆれはあっても、ノンテナイの回答は一つも出てこなかった。D 談話のように若年でない話者にも、「テナイ」のみの使用しか見られないことは、若年層だけの事象とも言いきれない。今回、談話を対象とすることで、こうした現象を把握することができ、回答式を補う有効性も示しえたのではないかと考えている。

4 まとめ

福岡の談話を資料にアスペクトの問題を考察してきた。未だ、福岡では、談話において、トルのヨル領域への侵入は明確には見出しがたかった。このように、談話式と回答式の結果は、異なった。しかし、どちらかが間違っているということでは決してない。また、談話式こそが大切などと主張するつもりもない。回答式の成果があったからこそ、この談話式の研究が成立しえたのである。それぞれは、アスペクトの問題の違った側面を指摘していると思われる。大切なことは、回答式を、理論・ラング研究、談話式を、運用・パロール研究と判断してしまわず、両者が補いあう方向へと向かうことであると考えている。

主要参考文献

- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書房
- 工藤真由美 (2000) 科研報告書 『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究 1』
- 工藤真由美 (2001) 科研報告書 『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究 2』
- 工藤真由美 (2002) 科研報告書 『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究 1』
- 工藤真由美 (2003) 科研報告書 『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究 2』
- 工藤真由美 (2004) 『日本語のアスペクト・テンス体系』 ひつじ書房
- 二階堂 (2004) 科研報告書 『地域方言の談話アスペクトにおける「話者認知スケール」に関する記述的・理論的研究』
- 二階堂 (2005) 「道教え談話にみる世代差・地域差」 『関西方言の広がりとコミュニケーションの行方』 和泉書院

付 記

これは第78回日本方言研究会（実践女子大 2004・5・21）での発表（「福岡のアスペクト 談話資料から 」）をもとに加筆・修正したものである。調査にご協力いただいた話者の皆様をはじめ、研究会にて、助言いただいた諸先生方に感謝する次第である。

（にかいどう ひとし・福岡女学院大学教授）